



双葉社

悪意

著者——東野圭吾

発行者——井上功夫

発行所——株式会社双葉社

東京都新宿区東五軒町3-28 郵便番号162

電話03(5261)4818〔営業〕

03(5261)4831〔編集〕

振替・00180-6-117299

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——株式会社若林製本工場

落丁・乱丁の場合は本社にてお取りかいたします。

定価・発行日はカバーに表示してあります。

©東野圭吾 1996年 Printed in Japan

ISBN4-575-23264-5 C0093

惡 意

装丁 中島かほる
装画 杉本 典巳

事件の章 野々口修による手記

1

事件が起きたのは四月十六日、火曜日である。

この日私は、午後三時半に自宅を出て、日高邦彦の家に向かった。日高の家は、私のところからだと電車で一駅だ。駅から少しバスに乗るが、それでも徒歩の時間を加えて、二十分もあれば到着できる。

ふだんから私は、大した用もなく日高の家に行くことがあったのだが、この日は特別な用件があった。というより、この日を逃せば、当分彼には会えないのだった。

奇麗に区画整理された住宅地の中に彼の家はある。立ち並んでいるのは高級住宅ばかりだ。そして時折、豪邸と呼ぶにふさわしい屋敷が見られる。このあたりはかつて雑木林で、それをその

ままそっくり庭木として残している家が多い。塀の内側にはブナやクヌギが生い茂っていて、道路に深い影を落としている。

その道路にしても、さほど狭くもないのに、このあたりはすべて一方通行だ。安全性もステータスの一つということか。

日高が何年か前にここに家を買ったと聞いた時、私は、ああやつぱりなと思った。この地域で育った少年たちにとつて、ここに住むことは夢の一つであつたからだ。

日高の家は豪邸とまではいかないが、夫婦二人だけで住むには、間違ひなく広すぎると思われる屋敷だつた。入母屋を採り入れた屋根の形などは和風だが、出窓があつたり、玄関がアーチ型になつていたり、二階の窓にフラワーボックスがあつたりするところは洋風のデザインである。

これはおそらく夫婦の意見を等分に取り入れた結果なのだろう。いや、塀がレンガ造りということと考えると、夫人の意見がより多く通つたと見るべきか。彼女はヨーロッパの古城のような家に住んでみたいと、かつて漏らしていた。

訂正。夫人ではない。前夫人だ。

そのレンガ塀に沿つて歩き、やはりレンガを長手積みにした門の前に立つと、私はインターホンのボタンを押した。

ところがいくら待つても応答がない。見ると、駐車場に彼のサープがなかった。出かけているらしいと了解した。

ではどうやって時間をつぶそうかと考え、桜のことを思い出した。日高家の庭には、八重桜が

一本だけ植えられており、この間来た時には三分咲きというところだったのだ。あれから十日近く経っているが、どうなっただろう。

人の家ではあるが、友人という立場に甘えて、勝手に入りこむことにした。玄関へのアプローチが途中で枝分れして建物の南側へと延びている。その上を歩き、庭へと回った。

桜はかなり散っていたが、まだ観賞に耐える程度には花びらを残していた。が、それを眺めている場合ではなかった。そこに知らない女がいた。

女は腰を屈め、地面を見ているようだった。ジーンズにセーターという軽装だった。手に白い布のようなものを持っていた。

あの、と私は声をかけた。女はびっくりしたようだ。こちらを振り返ると、ものすごい勢いで立ち上がった。

「あっ、すみません」と彼女はいった。「これが風に飛ばされて、この庭に入っちゃったものです。お留守みたいだったので、申し訳ないとは思ったんですけど」そして手に持っていたものを見せた。それは白い帽子だった。

彼女は三十代後半に見えた。目も鼻も口も小さい、地味な顔だちの女だった。顔色もあまりよくなかった。

帽子が飛ばされるほど強い風なんて吹いたかなと、私は少し疑問に思った。

「熱心に地面を御覧になっていたようすが」

「ええ。あの、芝生がとても奇麗なので、どんなふうに入手入れなさってるのかなと思ったんで

す」

「ふうん。いや、僕にはよくわかりません。ここは友人の家でね」

彼女は頷いた。この家の主が私でないことは知っているようだった。

「どうもすみませんでした」彼女は頭を一つ下げると、私の横を抜け、門のほうへ歩いていった。それから五分ほどしてからだろうか。駐車場のほうで車のエンジン音が聞こえた。日高が帰ってきたようだった。

私は玄関のほうに戻った。紺色のサープが、バックしながら駐車場に入っていくところだった。運転席の日高がこちらに気づいて、小さく頷いた。助手席に座っている理恵さんも、ほほ笑みながら会釈してくれた。

「すまん。ちよつと買い物に出るつもりが、道路が渋滞しちゃってね。参ったよ」車から降りるなり、彼は顔の前で手刀を切った。「ずいぶん待ったかい」

「いや、それほどでも。庭の桜を見せてもらってた」

「もう散ってただろう」

「少しね。でもなかなか立派な木じゃないか」

「咲いている時はいいがね、その後が大変だ。仕事場の窓が近いから、毛虫が入ってくることがある」

「それはそれは。だけど、当分ここで仕事をするかもしれないじゃないか」

「うん。あの毛虫地獄から逃れられると思うと、ほっとする。まあとにかく中に入ってくれ。ま

だコーヒを飲む程度の食器は出してある」

アーチ型の玄関をくぐり、我々は家の中に入った。

屋内は、ほぼ片付いていた。壁に飾ってあった絵も消えている。

「荷造りは終わったのかい」私は日高に訊いた。

「仕事場を除いて、大方終わったよ。まあ殆ど引越し屋任せだったがね」

「今夜はどこで寝るんだい」

「一応ホテルをとってある。クラウンホテルだ。でも俺はこちで泊まりかもな」

私と日高は、彼の仕事場に入った。約十畳の広さがある洋室だ。パソコンと事務机と小さな本棚が一つあるだけで、がらんとしている。残りは梱包してしまったのだろう。

「というと、明日までに書かなきゃならない原稿が、まだあるのかい」

私の質問に、日高は顔をしかめて頷いた。

「連載が一回分残ってる。今夜中にファックスで送ることになっているんだ。だからまだ電話を止めるわけにもいかない」

「聡明社の月刊誌かい」

「ああ」

「あと何枚書かなきゃいけないんだ」

「三十枚。まあなんとかなるだろう」

椅子は二つあったので、事務机の角を挟む形で座った。間もなく理恵さんがコーヒを運んで

きてくれた。

「バンクーバーの気候はどうか。こっちよりは寒いだろう」私は二人に訊いてみた。

「緯度が全然違うから。こっちは寒いさ」

「でも夏に涼しいというのはありがたいわ。冷房のきいた部屋にばかりいると、身体の調子が悪くなるから」

「涼しい部屋で仕事もはかどる、ということになればいいんだが、まあ無理だろうな」日高はにやにやした。

「野々口さんも、ぜひ遊びに来てくださいね。御案内できるようにしておきますから」

「ありがとうございます」

「ごゆっくり、といって理恵さんは部屋を出ていった。

日高はコーヒークップを持ったまま立ち上がり、窓から庭を眺めた。

「この桜が満開になるのを見られてよかったよ」と彼はいった。

「来年からは、奇麗に咲いたら写真を撮って、カナダに送ってやるよ。ええと、むこうにも桜はあるのかな」

「知らん。今度住む部屋の近くにはなかったようだ」そういつて彼はコーヒーを啜った。

「ところでさっき、変な女が庭にいたんだけどな」私は少し躊躇したが、やはり耳に入れておくほうがいいだろうと思って、話すことにした。

「変な女？」日高は眉を寄せた。

私はさっきの女のことを彼に話した。すると最初は怪訝そうにしていた彼の顔が、次第にほぐれていくのがわかった。

「こけしみたいな顔をした女じゃなかったか」

「ああ、そうだな。いわれてみればそうだった」比喻が的確だったので、私は笑った。

「新見といったかな。この近所に住んでいる。若く見えるけど、たぶん四十は過ぎてるんじゃないかな。中学生ぐらいの息子がいる。馬鹿丸出しのガキだ。旦那はめったに家にいない。たぶん単身赴任だろうというのが理恵の推理だ」

「ずいぶん詳しいな。親しいのかい」

「あの女と？ とんでもない」彼は窓を開けると、網戸にした。緩やかに風が入ってくる。風には葉っぱの匂いがしみついていた。「その逆だよ」彼は続けた。「どうやら恨みをかけているらしい」

「恨み？ 穏やかじゃないな。原因は何だい」

「猫だよ」

「猫？ 猫がどうかしたのか」

「あの女の飼ってる猫が、この間死んだらしい。道端で倒れていたんだそうだ。獣医に見せたら、毒にやられたんじゃないかって、いわれたんだとき」

「そのことと君と、どういう関係があるんだい」

「俺が毒ダングを仕掛けて、それを猫が食ったんじゃないかと疑っているらしい」

「君が？　どうしてそう思うんだろう」

「それが傑作でさ」日高はただ一つだけ残っている本棚から月刊誌を抜き取ると、真ん中あたりを開いて私の前に置いた。「これを読んだとき」

それは半頁ほどのエッセイだった。タイトルは『我慢の限界』。横に日高の顔写真がついている。私はざっと目を通した。エッセイの内容は、放し飼いにされている猫の被害に悩まされているというものだった。朝、庭には必ず猫の糞があり、駐車場の車のボンネットには足跡が点々とつき、鉢植えの花の葉っぱは食い荒らされている。白と茶色の斑模様の猫が犯人であることはわかっているが、対策のたてようがない。ペットボトルをずらりと並べたこともあるが全く効果がなく、我慢の限界に挑戦している毎日である——大体こういう内容だった。

「死んだ猫は、白と茶色の斑模様なのかい？」

「まあそういうことだ」

「なるほど」私は苦笑し、頷いた。「それじゃあ疑われるのも無理はないな」

「先週だったかな。すごい顔をして乗り込んできたよ。さすがに毒を仕掛けただろうとはいってこなかったが、殆どそれと同じ意味のことをいわれた。うちはそんなことしませんって、理恵が怒って追いついたんだけど、庭をうろうろしていたってことは、まだ疑っているんだな。毒ダンゴが落ちてないかどうか調べてたんだろう」

「ずいぶん執念深いんだな」

「あの手の女はそうだよ」

「君が当分カナダで暮らすことは知らないのかな」

「理恵があの子に話してたよ。うちは来週からしばらくバンクーバーに住むことになっている、だからお宅さんの猫が少々いたずらしても、あと少しの辛抱だと思っただけですってな。ああ見えても、彼女はなかなか気の強いところがあるんだ」日高は面白そうに笑った。

「でも理恵さんのいうことは筋が通ってる。君たちがあわててその猫を殺す理由なんか、ないはずだもんな」

この私の言葉に、なぜか日高はすぐには同意してこなかった。相変わらずにやにやしながら窓の外を眺め、コーヒーを飲み干してから、ぼつりといった。「俺がやったんだ」

「えっ？」彼のいった意味が咄嗟にわからず、訊き直した。「何だって？」

彼はコーヒーカップを机に置き、代わりに煙草とライターを取った。

「俺が殺したんだよ。毒ダンゴを庭に仕込んでおいたんだ。まさか、あれほどうまくいくとは思わなかったがね」

この台詞を聞いても、まだ私は彼が冗談をいつているようにしか思えなかった。しかし彼の顔は笑ってはいないが、冗談をいう時のものではなかった。

「毒ダンゴなんかどうしたんだい」

「どうってことない。キャットフードと農薬を混ぜて、庭に転がしておいただけさ。育ちの悪い猫は、何でも食っちゃうようだな」

日高は煙草をくわえ、火をつけて旨そうに煙を吐いた。網戸を通して入ってくる風に、その煙

はすぐにかき消された。

「どうしてそんなことをしたんだ」私は訊いた。あまりいい気分ではなかった。

「この家、まだ借り手が見つからないって話はしたよな」少し真顔になって彼はいった。

「うん」

日高夫妻は自分たちがカナダにいる間、この家を人に貸そうと考えていた。

「不動産屋が引き続き探してくれることになっているが、この間ちよつと気になることをいわれてね」

「どんなこと？」

「家の前にペットボトルを並べてあるのは印象がよくないってさ。いかにも猫の害に悩まされてるって感じがするかららしい。たしかにそれじゃあ、誰も借りたがらないよな」

「じゃあそんなものの片付ければよかったじゃないか」

「それでは本質的な解決にはならんよ。借りたいつていう人間がこの家を見に来た時、庭に猫のクソが散らばってたらどうなる。俺たちがいれば掃除もできるけど、明日からは誰もいないんだからな。さぞかしいい臭いを放ってくれるだろうさ」

「それで殺したのか」

「飼いに責任があるんだぜ。それをあの新見つていう主婦は、わかってないらしい」日高は煙草を灰皿の中でもみ消した。

「そのこと、理恵さんは知ってるのかい」

私が訊くと、彼は片方の頬で笑いながら首を振った。

「知るわけないだろう。女つてのは、猫好きが多いからな。本当のことを話したら、俺のことを悪魔みたいにするだろう」

何とも答えようがなく、私は黙っていた。するとタイミングよく電話が鳴った。日高が受話器を取った。

「もしもし……ああ、こんにちは。そろそろ電話がかかってくる頃じゃないかと思ってたんです。……ええ、予定通りです。……はは、見抜かれましたか。これから始めるところです。……そうですね、今夜中には何とかなるんじゃないかと思えますよ。……ええ、じゃあでたら送っておきます。……いやそれが、この電話は明日の午前中までしか使えないんです。だからこちらから電話します。……ええ、ホテルから。それじゃそういうことで」

電話を切ってから、彼は小さく吐息をついた。

「編集者かい」と私は訊いた。

「聡明社の山辺さんだ。俺の原稿が遅れるのはいつものことだが、さすがに今回は冷や冷やしているようだ。何しろここで逃がしたら、明後日には日本にいないからな」

「それでは邪魔しないよう、そろそろ失礼するよ」私は椅子から立ち上がった。

その時だった。インターホンの音が聞こえた。御用聞きか何かだろうと思ったが、そうではないようだった。理恵さんが廊下を歩く音がして、続いてドアがノックされた。

「なんだい」と日高がいった。

ドアが開き、理恵さんが憂鬱そうな顔を覗かせた。

「藤尾さんがお見えになったんだけど」声をひそめていった。

日高の顔が、スクールを前にした空のように曇った。

「藤尾……藤尾美弥子かい？」

「ええ。どうしても今日中に話したいことがあるからって」

「参ったな」日高は唇を噛んだ。「俺たちがカナダに行くことを嗅ぎつけたんだろう」

「忙しいからって、帰ってもらう？」

「そうだな」彼は少し考えてから、「いや、会おう」といった。「こっちとしても、ここで決着をつけておいたほうがすっきりする。この部屋に通してくれ」

「それはいいけど」理恵さんは氣遣うようにこちらを見た。

「あつ、僕はもう失礼するつもりだったから」と私はいった。

すみません、といって彼女はドアの向こうに消えた。

「困ったもんだ」と日高がため息まじりにいった。

「藤尾っていうと、藤尾正哉の？」

「妹だよ」彼は、やや長髪の頭を掻いた。「少し金を寄越せという話なら簡単なんだけど、回収や書き直しという話になると、とても応じられない」

足音が聞こえてきた。日高は口をつぐんだ。廊下が暗くてすみません、という理恵さんの声をする。そしてノック。「はい」と日高。